

岩手医科大学歯学会第 39 回例会抄録

日時：平成 7 年 2 月 25 日（土）午後 1 時

会場：岩手医科大学歯学部 4 階講堂

演題 1. 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織
検査の報告 - 1993 年度の集計 -

○佐藤 方信, 藤井 佳人, 菊地 博生

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

1993 年度に取り扱った病理組織検査について集計した結果を報告した。検査件数と症例数の集計は本学中央臨床検査病理部門に保管されている病理組織検査台帳をもとに行った。臨床的事項は組織検査依頼書の記載を参照した。検査件数は 644 件（学外 65 件）で、学内の症例は全て口腔外科からの依頼であった。検査件数を月別に見ると、11 月、12 月、4 月、9 月が多く、3 月と 7 月は少なかった。迅速診断件数は 33 件であった。検査症例数は 512 例（学外 63 件）で、年代別には、60 歳代（107 例）が最も多かった。組織診断別にはエナメル上皮腫 3 例、乳頭腫 7 例、線維腫（線維性ポリープ、刺激性線維腫など）27 例、血管腫 7 例、脂肪腫 4 例、過角化症（白板症）22 例、上皮性異形成 3 例、線維性異形成 3 例、唾液腺の多形性腺腫 3 例であった。悪性病変では扁平上皮癌 41 例、悪性黒色腫 3 例、疣贅癌 1 例、未分化癌 1 例、上皮内癌 2 例、腺様嚢胞癌 2 例、横紋筋肉腫 1 例などであった。嚢胞性病変は歯根嚢胞 37 例、原始性嚢胞 13 例、含歯性嚢胞 14 例、唾液腺嚢胞 34 例、術後性上顎嚢胞 31 例、切歯管嚢胞 1 例、類表皮嚢胞 4 例であった。明確な組織診断が出来なかった嚢胞性病変が 8 例あった。そのほか、慢性限局性過形性歯肉炎（エプーリス）18 例、シェーグレン症候群 27 例、扁平苔癬 6 例、慢性上顎洞炎 5 例、唾石症 5 例、骨髄炎 2 例、カンジタ症 1 例であり、慢性炎症性（肉芽、潰瘍）組織などと診断したのが 70 例と多かった。歯根嚢胞は上顎の前歯部から右臼歯部に多く、下顎では左臼歯部に多かった。原始性嚢胞と含歯性嚢胞は上顎に少なく、下顎に多かった。扁平上皮癌では舌癌が 17 例、歯肉癌が 11 例、頬粘膜癌が 5 例、口蓋粘膜癌が 4 例などであった。

演題 2. 各種療法後に疼痛の完全消失が得られなかつ
顎関節内障の 2 例○八幡智恵子, 青村 知幸, 宮手 浩樹
村上 裕子, 瀬川 清, 大屋 高德
工藤 啓吾, 小早川隆文*岩手医科大学歯学部口腔外科学第 1 講座, 花巻
市開業*

今回我々は、各種療法を施行したにも関わらず、疼痛のコントロールに苦慮している 2 症例について、若干の考察を加え報告した。

症例 I は初診時 21 歳の女性で、15 歳頃から右側顎関節にクリッキングと疼痛が生じるようになり、他施設にて保存療法、ステロイド剤の局注療法を受けたが症状の改善がみられないため、1987 年 5 月 18 日当科を紹介され受診した。臨床所見および造影所見から、初診時の診断は右側顎関節症 III 型（復位性円板前方転位）としたが、後に自発痛の増悪と MRI 所見で非復位性円板前方転位が確認されたため、1990 年 11 月、全麻下に両側顎関節鏡視下剥離授動術を施行した。術中所見では強い滑膜炎と関節包外側壁のヒダ状突出が認められた。術後約 1 年間は自発痛なく経過したが、1992 年 1 月頃より再発し、現在も軽減と増悪を繰り返している。

症例 II は初診時 24 歳の女性で、19 歳頃より開口障害、24 歳頃より左側顎関節にクレピタスおよび運動時痛が発現し、某医にてスプリント療法を受けたが増悪し、1989 年 6 月 9 日当科を受診した。なお、19 歳頃転換型ヒステリーにて入院した既往がある。診断は、臨床所見および造影所見にて左側顎関節症 III 型（非復位性円板前方転位）とした。両側顎関節鏡視下で強い線維性癒着、および穿孔が認められたため、1990 年 2 月全麻下に両側顎関節円板切除術と silastic による同置換術を、また、1994 年 8 月に silastic 除去術を施行した。術後は一時的に疼痛は消失したが、現在もなお、再発を繰り返している。

今回発表した 2 症例における疼痛の原因を検討する